

あの頃の風景

おくのほそ道 第10回

変わる町並み、変わらない風景 「酒田」

株式会社オリエンタルコンサルタンツ/関東支店都市デザイン部
金野 拓朗 KONNO Takuro (会誌編集専門委員)



『暑き日を海にいれたり 最上川』



① 現在の最上川と落日の風景

松尾芭蕉は1689(元禄2)年6月13日(現在の7月29日)の夕刻に山形県酒田市に到着した。最上川の河口に位置する酒田は、1672(寛文12)年に河村瑞賢が開拓した西廻り航路と最上川、さらに浜街道と海・川・陸の交通の要所に位置していたことから、米を中心とした物流の一大拠点となっていた。その隆盛は「西の堺、東の酒田」と言われたほどで、芭蕉が到着した当時は活気ある町並みであった。よほど居心地が良かったのか、旅の疲れもあったのか、芭蕉は酒田で9日間滞留している。

最上川の河口にある酒田港周辺では、今も当時の歴史を伺い知ることができる。地域のシンボルとなっている山居倉庫は、かつての米蔵の名残であるが、このよう

な問屋の蔵々が港沿いに建ち並んでいた。かつて船頭が日和を見ていた日和山公園には、江戸への御城米置場であった河村瑞賢庫跡や六角灯台といった酒田港の賑わいを支えた遺跡や遺物を見ることができる。近くには芭蕉が通過したとされる芭蕉坂が残る。

奥州平泉から尿前しとまへの関を越え、立石寺りっしやくじ、出羽三山を経て、久しぶりに海と出会った芭蕉は、日本海へ落日する情景を見て、表題の句を詠んだ。

河口には広大な風景が現在も残る一方で、酒田の市街地は幾度かの火災に見舞われた。明治以前の酒田の町並みは、広島や倉敷のような土蔵造りの「蔵の町」であった。しかし1,700棟余りを焼失させた1894(明治

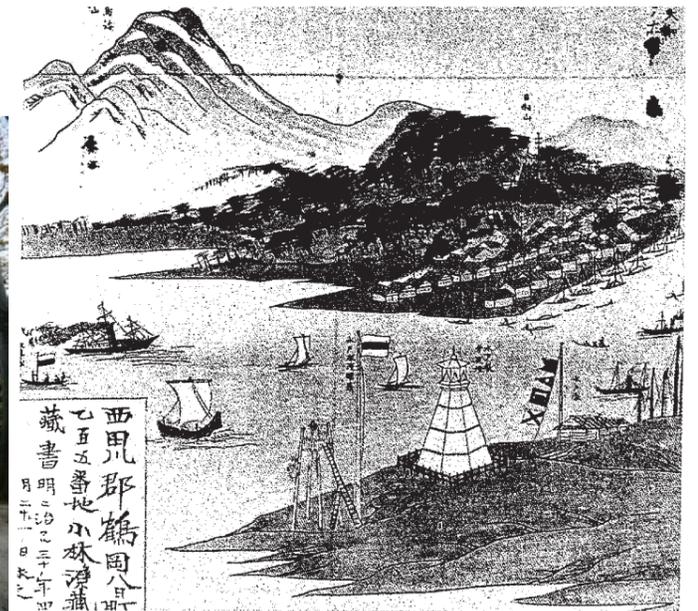


②(上) 現在の中心市街地。今もなお、中心市街地活性化の取組みを続けている

③(左) 切り妻の屋根が連なる明治中期ごろの町並み

④(右) 河口に倉庫が立ち並ぶ明治期の風景。図右上に日和山の表記がある

⑤(下) 現在の山居倉庫。かつての米蔵の雰囲気が残り、酒田市のシンボルとなっている



27)年の庄内大地震や、1,767棟を焼失させた1976(昭和51)年の大火により、中心市街地にかつての町並みはほとんど残っていない。この大火以降、防災都市の建設を目指し、国・県・市が一体となり区画整理や市街地の再開発、住民の防災意識を高める方策の実現などを短期間で成し遂げた。

1990年代からはデパートが相次いで撤退し、2012(平成24)年には庄内地方の百貨店として親しまれた中合清水屋も撤退を表明したことで、中心市街地の衰退が危ぶまれた。しかし、市・県・地元商店街・有識者が中心市街地のデパートの重要性を訴えた結果「マリン5清水屋」として再オープンし、中心市街地の核を取り戻すことに成功した。また、郊外への移転を検討していた民間病院を中心市街地に誘致し、「安心とともに暮

らすまち」を掲げる中町サントウンなど、人口が流出しないための取組みも行っている。

変化を恐れず改良を続けていく中心市街地と、昔ながらの風情が残る港の風景。その対比が、酒田の町に独特の奥行きを醸し出している。

今回の「あの頃の風景」は新潟県出雲崎町です。

<参考文献>

- 1) 『酒田市史上巻』酒田市史編纂委員会 1987年3月 酒田市
- 2) 『酒田市史下巻』酒田市史編纂委員会 1995年3月 酒田市
- 3) 『目で見える酒田・飽海の100年』伊藤 良一 1995年7月 郷土出版社

<写真提供>

- ①、② 金野拓朗 ③、④、⑤ 酒田市役所

<取材協力>

酒田市役所 市史編さん室